
葉集を読む

松岡 隆子

朝顔の種とるころよ旧路地

中谷信子

佃島は近年高層ビルが立ち並び一部景観が変わったが、住吉神社や佃小橋のある一帯などは殆ど変わらず、暮しの路地も昔のままの佇まいだ。細長い路地は人がやっと通れるほどで、プライバシーも筒抜けだが、そこには互いに触れ合い助け合つて暮らす下町ならではの温かさがある。朝顔の種を取つて来年の種蒔きまで大事にしまつておく、丁寧な暮らしがある。江戸時代から続く佃の下町の情緒に、中谷さんはいま静かに感動している。

一步一步剥がしつゆく炎天下

梶浦 道成

炎天下のコンクリートジャングル、40度を超えんばかりの猛暑日は、地表の温度は60度にも70度にもなろうか。自ずと足取りが重くなる。

一步一步重い足を持ち上げるように歩く。(剥がしつゆく)という把握の獨創性に瞠目した。同時作の(ダンパー砂礫もろとも灼けにけり)や(炎天の己の影に杭を打つ)と共に、炎天を真正面から詠んでいて力強い。

塗りたての横断歩道小鳥来る

植田喜代子

替えられたばかりの横断歩道が秋の日差に眩しい。手を振つて颯爽と渡る。吹く風が心地よい。森では木の実が色付きはじめ鳥たちが渡つて来るころだ。ただの横断歩道が、塗り替えられたというだけで注目される。(小鳥来る)によって詩となる。同時作の(森吹かれ来て秋麗の蝶となる)の(秋麗の蝶)の美しさも目を引く。日々を心細やかに生きながら、植田さんはいつも前向きだ。自らを励ますように明るさ(目を向けている)。

起きぬけの部屋の隅まで残暑かな

岡 美穂

起きたばかりというのに(部屋の隅まで残暑とは、今日一日の残暑の厳しさ)が思いやられる。上五から下五へと畳み込むように一気に詠み込まれた残暑は印象的だ。立秋を過ぎてからの暑さは殊のほか凌ぎ難い。一読、作者の残暑は私たちが自身の残暑となる。